
私と彼らのやんごとなき事情

水日子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と彼らのやんごとなき事情

【Nコード】

N9327Z

【作者名】

水日子

【あらすじ】

高校入学式の直後、自宅に帰った私はそこでとんでもないものを見る。私の部屋が平安時代の羅城門と繋がっている？ クラスメイトが安陪晴明の生まれ変わり？ 拒む彼女と懲りない彼ら、そんなこんなで降りかかってきたみやびなお歴々との日々は。「とりあえず、感動したからっていちいち泣くなよ……」

世の中に たえて櫻の なかりせば 春の心は のどけからまし

拝啓、天国のお母様。

不肖沢木時子、部屋で野郎が泣いてました。

沢木時子（仮名ではない）十五歳、高校の入学式という晴れがましい行事を終えた直後。家の鍵をさして、帰宅して、制服を着替えるのもそこそこに、新品も新品、ぴかぴかの鞆を下ろすために二階の自室に足を踏み入れた瞬間。

な、んか、いたん、だが。

私の部屋は、ドアを開くと真正面に窓があつて、そのすぐ下にベツド、右隣に机で左は本棚がある。まあ一般的な学生によくあるレイアウトだと思う。細かい配置はまちまちだろうけれど、ありふれた部屋だ。

そのありふれていたはずの部屋をことごとく台無しにしやがったふざけた身の程知らずは、よりによってその、正面の窓枠にもたれていた。それだけでも万死に値するというのに、謎の物体はこともあるつか 本当、自分でも気色悪いこと言っているのは重々承知だが、苦情は目の前の不法侵入者に申し立ててくれ 泣いて、いたのだ。

はらはらと、泣いているのだ！ これだけでも私の置かれた場面の異常性がはかれるというもの。

それで、どうしたって？

閉めたよ。速攻ドア閉めたさ！ それ以外にどうしろと！

とりあえず深呼吸して、状況把握に励んでみた。こんなに頭を使ったの、もしかしたら高校受験でもなかったかもしれない。

えーと、今日はお父さんが先に出勤したから、朝食の皿洗いをし、そのあと洗濯物が干されていないことに気付いて、慌てて干して、ちくしよう、あのオッサン上手くずらかりやがって、覚えてやがれ。それから時間がやばいことになって、超特急で家を出て……アレ？

鍵、閉めたっけ？

「待て、待て待て待て。いや待て、これは待つんだ。落ち着け落ち着くんだけ何事も冷静沈着それが僕らのモットーだろそうだろジエフアニー」

失礼、やはり私ではこの事態を呑みこみ、咀嚼し、理解するまでに結構な時間を要するようだ。所詮私の錆びたシナプスではこれが限界ということだな別に悲しくなんかないさ！ ちなみに私の交友関係に外国の友人はいない。ジエフアニーという名前の日本人もいない。

話がそれた、とどのつまり、私が施錠したかの記憶がないわけで、鍵をかけていない可能性も無きにしも非ずなわけで、そうすると最も確率的に高いのは、あの物体は人間で、さらに、いわゆる、いわゆる、泥棒とか空き巣とか呼ばれるものなのでは？

んでもって、そういう輩が家人に現場を目撃され、なおかつ逃げられない場合、取るであろう行動は？ ハイハイ、簡単だよその家の人を殺しちゃえばいいんだよ！ そうですね。さすが沢木さん、論理的ですね。えへへー……。

ころされる

ちよ、まずいよ、自問自答家庭教師バージョンなんかやってる場

合じゃないよ。つつかさつきから私のシナプスはどうなっているんだ、錆びてるどころか腐ってるのか。しかも未だに私の脳内はどことも知れない家庭教師と話しているんだが。どこの電波受信しているのかぜひとも伺いたい。あ、今、家庭教師のことジェファニーって……おまえかよおおおお！ まじで何者なんだジェファニー！

と。

「お？」

私は肝心なことに気がついた。

目下の疑問はアレが何者であるのかということだが、その下層フォルダにある施錠の成否について、私はある重大な発見をした。むしろ何で今の今まで見逃していたのか不思議だが、そこはそれ、先ほどまでの言動含めて温かい目で見守ってもらいたい。

発見とはほかでもない、冒頭部分を再読すればすぐさま判明する事実であったのだ。

>家の鍵をさして、帰宅して、制服を着替えるのもそこそこに、新品も新品、ぴかぴかの鞆を下ろすために二階の自室に足を踏み入れた瞬間。

家の鍵をさして。ということは、家の鍵を差し込まなければドアが開かなかったと、そういうわけで。

ええと？

恐る恐る、ほんのわずか、ドアに隙間をつくってみた。ひどく狭い視界で、逆光になっているせいで黒い人影は、相も変わらずそこに佇んでいる。見たところ 男か？ 女の人とは明らかに違う骨ば

った体躯がシルエツトになって映し出されている。

その黒一色の最中で、ただ、涙が描く一筋だけが陽光を反射して小さく煌いた。

私はこくりと息を呑む。

これが盗人というなら、日本は既に滅んでる。そう思った私を誰が責められるのか。

「……あの、」

「美しいな」

ざあ、と。

まだ肌寒さを残す風が強く吹きつけてきて、開け放された窓から近所の桜並木の花びらが舞い込む。風にさらわれた桃色は、黒い影をとどころどころ遮ってはあちこちを彩った。

あふれんばかりの桜花。ああ、もう散ってしまふ。今週末には花見をしないと、と私は春霞のようにぼんやりした頭でそんな場違いはなほだしいことを考える。

男は口元に付いたひとひらを丁寧に摘んで、聞こえるか聞こえないかぐらいの微かな嘆息を漏らした。

「はかないな。……こうも、はかないかよ」

愚痴のようなのろけのようなさっぱり分からない調子で呟いて、男は一心に窓の外の桜を見つめる。その場から身じろぎひとつせず、彼は整然とそこにあった。はらはらと零れ伝う涙はとどまることを知らず、また男自身、とめるつもりもないようだった。

て、いうか。

「誰だ、おまえ」

ろくでもない人間とはろくでもない出会い方をすると亡き母は言った。私もそう思う。実証してみるといわれたら、私は迷わず答えるだろう。

忌々しいことにその典型が私、沢木時子と彼のファーストコンタクトなのです。実に遺憾だが。

世の中に たえて櫻の なかりせば 春の心は のどけからまし（後書き）

「世の中に たえて櫻の なかりせば 春の心は のどけからまし」

世の中にまったく桜というものがなかったら、春をのどかな
気持ちで過ごせるだろうになあ、みたいな歌。素人解釈ですすみま
せん。

続

密封された袋を開けると、あたりに香ばしい匂いが立ち込めた。

私にはとてとても飲めない粗挽き深煎コーヒー、ブランドはややマイナーながら根強いリピーターを誇る老舗だ。何を隠そう、その根強いリピーターのうちの約一名は我らがお父さまなのだ。酒も煙草も嗜まない分、まるっとこいつにつき込んでいる。父子家庭のエンゲル係数が一般的四大家族と変わらないのは、はっきり言ってこれのせいだ。たかが嗜好品のくせに、生意気な奴である。そんなにぞつこんならいつそコーヒーと結婚してしまえ、と以前キレたことがあるが、あのお父様の反応はなかった。正直言ってなかった。

情けなさそうに眉を八の字にして、「いちばんは文子さん。コーヒーは二の次だから、ね？」。ね？ じゃないよ、私はどこ行った、愛娘はコーヒー以下ですか。ああそうですか。

前置きが長くなったが、とにかく以降私は一切のコーヒーがきらいだ。受け付けない。あんな憎いアンチクショウの姿なんか二度と目にしたくない。バクテリアが繁殖した泥みたいなビジュアルの液体をよく飲めるものだ。信じられん。

で、そんな私がなぜバクテリアが繁殖して、さらに最近では醗酵してみました、エヘッ、みたいなイカレタ溶液をつくっているのかといえば。

そそいだ先のマグカップに注目してもらいたい。真新しいシンブルな無地のマグカップ。勘のいい人はこれで気付くと思うが、客人用である。

客っていうか、あの人むしろ賊だよね、という突っ込みはスルーさせていただく。

誰何の声に、男はゆっくりと振り返る。男の背後で少し傾いた日が覗いて、私は目を眇めた。

男は、正直に言おう、　　すげえ、イケメンだった。

涼しげな目元に通った鼻梁、やや薄めの唇は綺麗な弧を描いている。昨今のジャーニーズのような甘い顔立ちではないけれど、硝子のよくな透明な雰囲気をもとう人間だ。

そしてそんな男だが、私の姿を認めたとたん、

「うおっへ!？」

……百年の恋も冷めるとはこのことだろう。いや恋してないけど。いつ何時もコイツに恋した瞬間は存在しないけど。

男はそんな奇想天外奇妙奇天烈奇奇怪怪な叫び声をあげて、落ちた。

改めて言っておくが、私の部屋は二階である。そんでもって、下には庭があつて、物干し竿があつて、今日のような日和にはたくさんの洗濯物が干してあるのが定石だ。

案の定、男が落下した1.67秒くらいにとんでもない騒音が発生した。慌てて窓に身を乗り出せば、せつかく干した衣類がしわくちゃになりながら山をつくっていて、その中央に男が半分埋もれるように転がっている。

……とりあえず、お父さんのパンツを頭に被るのはよしたほうがいいと思うよ。

と、まあ一通りの回想が終わったところで、私は現在男にコーヒ―を差し出して、正面に座しているわけだが。

どうしてか男はマグカップの中身を見て、ぎよっとしたように頬骨の辺りを強張らせている。あ、コーヒー駄目でしたか。同志！心残りなのは、せめてもっと健全かつ常識的な状況下でお会いしなかったことだ。こんなよく分からん、暫定泥棒みたいな男と盛り上がれるほど私の神経は凶太くない。いや、ここまで間抜けで泥棒とかわれたら、私は日本警察の操作能力を疑わざるを得なくなるがとにかく、妙な事態になってきているのは間違いないので、極力相手を刺激せずに話を聞こうじゃないか。そのために洗濯物の山から救い出し、あまつさえ父親の秘蔵コーヒーに手まで出したのだから。

深呼吸、スーハー、スーハー、はい口を開いて！

「それで」

「待て」

あんまりひどくないか？

「……なんですか？」

「これはなんだ」

男が示す先は、毒々しい色を放つ魔の液体。ああ忌々しい。

「……コーヒーですけど」

「「うーひー？」」

やばい、そろそろ目を背けるのも無理な展開になってきた。くそ、おとなしく玉露でも出せばよかったぜ。

「ご存じないんですか」

「知らない」

私は男の着ているものとか、男がお父さんのパンツの代わりに今被っているものとか、その他諸々を見ないように、つまり男の顔をひたすら凝視した。超絶イケメンを見つめるとかどんな拷問だ。眼球が焼ける。これで下旬にある測定で視力が下がったら、100パーセント貴様のせいだ。三代先まで崇つてやる。

男はしばし、マグカップに目を落として、それから優雅な仕草でテーブルに置いた。おい、飲まないのかよ！ それお父さんの地雷同然だったのに、私の犠牲はどうしてくれる！

男はカップの取っ手を掴んでいた手を頬に当てて、物憂げにこちらを見た。ちょ、心臓に悪いんでやめてくれませんかね。

「ばれたら仕方あるまいな」

いやばれてませんから大丈夫ですから都合よく目を逸らしておりますから視力低下の危険まで冒してますからお願いだからその苦勞を無駄にすんなよ！

「実はな」

実でも虚でも何でもいいから黙ってくれませんかね！ 私の華々しい高校生活に水を差さないでください。

という私の必死の願いも届かず、

「俺は平安時代から来たのだよ」

微笑を含んだような口元を呆然と眺める。その視線を直下すれば、現代では早々お目にかかれない手の込んだ衣服。服っていうか、これは中学のときに国語便覧に載っていた直衣のうしにクリソツなんですかね、どうすればいいですかね。

ついでに、目を高速で急上昇させると、視界を占めるのは、ドームのような半円球をスマートにさせてみました、とでもいいかげな被り物。つーか、これもいつぞやの国語便覧記載の立烏帽子たてえほしとかいうシロモノじゃなかったですかね。

というかもしかしなくてもそつだよね！

「あああああっ！」

「俺は在原業平という」

は？

「いやほんとあの、私はそういう冗談に疎くてですね、そういうノリで不法侵入誤魔化そうとか通用しませんから」

貴様が頭が弱いということは分かった。十分分かった。何も盗つてないなら見逃してやるから、そんなかわいいそうない訳は言うな。私も聞きたくない。

在原業平なんて軽く千年近く前の時代の人間だ。そんなあほあほしい言い逃れがあるか。小学生でも見破るわ。

「困ったな」

そつだな間違いないくお前は困ったちゃんだ。警察と救急、どつちに通報するか私も迷うところだよ。ひとまず帰ってくれますかねマジで。

「帰れといわれてもな……あ、」

「あ？」

イカンイカン華の女子高生がこんなチンピラのカツアゲのような

台詞。脳内補正がかかっていたからよいものの、第三者が聞いたら絶対に濁音がついていたはずだ。もつと精進しなくては。

男はあ、と声を漏らしたきり、しきりにうんうんと頷いている。

「帰ればよいのだな？」

「はい」

ぜひともそうしてくれ。

「では帰ろう」

そう言って男はつと立ち上がると、一階の居間を抜けて 階段を上り始めた。

「へ？ ちょっと！」

帰るんだろーが、舌の根も乾かぬうちに何しでかしてくれんだ。

真面目に通報するぞ。今度は迷わず110と119どっちにも通報するぞ。

冷め切ったコーヒーに舌打ち一つ残して、私も男のあとを追いかける。足音荒く階段を踏み鳴らし、上り終えたところで私の部屋に消える直衣の裾が見えた。

ドアを突き破る勢いで駆け込むと、私は本日二度目のトンデモ光景を目の当たりにした。

男は本棚の中段にある本の背表紙をなぞっていた。あそこにはお父さんが道楽で買ってきた古事記とか源氏物語とか万葉集とかが収められている段だ。

男はその中の一つで指を止めて、口の中で何事かを呟く。

「え？」

そうするとどうだろう、男の身体が徐々に陽の光に透けはじめただけでなく淡くふちに光が溜まって、まるで男自身が発光しているような錯覚すら覚える。

なにこれ。なんだこれ。

「すまぬな」

男は、その場に立ちすんでいる私に気付いてほろ苦く笑った。

「学び舎が今日に限ってこうも早くしまいになるとは思わなんだ。すまぬな」

なに、いつてるの、このひと。男の言葉の意味が分からない。私のシナプスはやっぱり腐っているらしい。

窓の光と男の姿が同化する直前、私は確かにこんな言葉を聞いた。

「コーひー、馳走になった」

そうして男は『帰った』。

男が帰ったあとに残されたのは私と、私が帰宅する前とそっくりの部屋。ただひとつ違うのは、空間のあちこちに貼りついている桜だけで。

開け放たれた窓から、風が私の前髪を吹き上げる。私は先刻の男の台詞を思い出して脱力する。

「結局、飲んでないじゃん……コーヒー」

と、いつか、この部屋を掃除するのは誰ですか。私か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9327z/>

私と彼らのやんごとなき事情

2011年12月31日01時48分発行